関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[文献紹介] 野村 幸正・金敷 大之・森田 泰介 著『新しく学ぶ心理学』

著者	森田 泰介
雑誌名	教育科学セミナリー
巻	36
ページ	137-137
発行年	2005-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019368

文献紹介

野村 幸正・金敷 大之・森田 泰介 著
『新しく学ぶ心理学』

(㈲二瓶社　平成16年1月30日　本体1480円＋税)

森　田　泰　介

本書は新たに心理学を学ぼうとする者を読者に想定して、教養の心理学を本学において担当している野村幸正、金敷大之（本学文学研究科を単位取得退学後、日本学術振興会特別研究員を経て、現在、畿央大学講師)、森田泰介（本学文学研究科を単位取得退学後、現在、日本学術振興会特別研究員）の3名が著したものである。

次に記す章立てを見る限り、これまで心理学の研究が蓄積してきた主要な知見の多くが取りあげられており、心理学の入門書としてはほぼ一般的な構成になっているといえる。

序　章
第一章　変化の把握―感覚・知覚
第二章　処理様式の進化
第三章　記憶の働き
第四章　心の深層―フロイト
第五章　深層の拡がり―ユング
第六章　文化―人間の特殊性
第七章　個の総和以上のものをもつ集団
第八章　行動傾向としての性格
第九章　適応の根源としての知能、そして智慧
第十章　持続する適応としての生涯発達
終　章　いま・ここの私と心理学

著者らのねらいは、しかしながら、従来の心理学的な基礎知識の習得そのものにあるのではない。また、それらの知識を現実場面に直接適用できるようにすることでもない。心理学的な知識を言語から獲得するだけでは、他者理解・自己理解を十分行えるようにはならないのである。なぜなら、言語で語られる心理学的な知識には、暗黙知・身体知といった、目には見えにくいが重要であるものが欠落しているからである。また、獲得した心理学的な知識を現実場面に適用しようとしたとしても、それらの知識は実体のない平均的な人間に関するものであるため、厳密な意味では一回限りの人生を生きる、個性豊かな人々の実態を把握することが難しいからでもある。

このような限界を踏まえ、本書では、個々人がみずからのいま・ここでのあり方を捉え、その拡がりの真っ只中で人間とは何か、自己とは何かを問い続け、さらに未来の自己を構築してゆくことが重要であることを各所で主張しつつ、そのために必要となる知識を提供できるよう配慮したつもりである。例えば、性格が脳損傷により変化した症例や、ドルイドの魔法をかけられた半動物・半植物の不思議な木のエピソード、年齢を重ねるにつれて機能的な低下が起こるからこそ発達する心理的な側面など、人間の本質とは何か、生きるとはどういうことかを考えさせる話題が、一般的な心理学的知見に加えて組み込まれている。

読者が本書をとおして心理学の知見を学ぶなかで、自己知を獲得し、自己を豊かに涵養してゆかれることこそが、著者らのねらいである。自分はどのような人間なのか。自分はどのように生きてゆくべきなのか。本書が、一生涯繰り返される自問自答の営みを下支えする核となるような自己知を読者各人が見出す契機となることを、著者らは願ってやまない。